

「官報」第八六三〇號 明治四十五年三月二十九日

【補注者付記】

- ・送仮名を除き、本文の片仮名を平仮名に改めた。なお、補注は本プログラムの佐藤進・日野俊彦が行なった。(平成二十一年十一月九日補訂)
- ・孟・梁惠王上 などの出典は補注者によるもので、原文にはない。出典表記が無いものは日本漢文からの引用だと思われるが、検索の便がなく確認できなかった。
- ・「官報」に少なからず誤植が見られる。できる限り【注】でコメントしたが、「句讀法以下諸則適用の例」では指摘していない。

漢文教授に關する調査報告

文部省に於て曩に文學博士服部宇之吉外十人に漢文教授に關する事項の取調べを囑託せしが今般漢文の句讀、返點、添假名、讀方に關し左の通取調べたる旨文部大臣に報告せり(文部省)

句讀法

第一 句讀は語句の關係を明瞭にし文義を領會するに便利なるを主とす其の符號左の如し

- (イ) 句點。
- (ロ) 讀點、
- (ハ) 竝列點、

第二 語意共に切れたる時は句點を用ふ其の例左の如し

- (一) 鳥啼。
- (二) 花開鳥啼。
- (三) 君子不器。
- (四) 割鶏焉用牛刀。

第三 文意相連接せる語句の間に區別を要する時は讀點を用ふ其の例を分つこと左の如し

(甲) 副詞的性質を有して下文に連續する語句の下

- (一) 雖有臺池鳥獸、豈能獨樂哉。 孟・梁惠王上
- (二) 縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。 史・項羽本紀
- (三) 苟能充之、足以保四海。 孟・公孫丑上

(乙) 形式より見れば終止したれども意義より考ふれば下文に連續せる語句の下

- (一) 事至而循循焉、欲去之使他人任其責、則天下之禍必集於我。 蘇軾・鼂錯論
- (二) 蓋有之矣、我未之見也。 論・里仁
- (三) 子謂韶、盡美矣、未盡善也。

【注】 論・八佾 は「子謂韶、盡美矣。又盡善也。謂武、盡美矣。未盡善也」に作る。

(丙) 管到の文字の下にある各語句の下

(一) 君子欲訥於言、而敏於行。 論・里仁

(二) 唯恐耳目有所不聞見、思慮有所未及、以負成王託周公之意、不得於天下之心。
韓愈・後二十九日復上書

(丁) 排比せる各語句の下

(一) 天下之大、萬民之衆、王侯之威、謀臣之權、皆欲決於蘇秦之策。

戰國策・秦

(二) 冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。 論・先進

(戊) 提示せる語句の下

(一) 子路、人告之以有過則喜。 孟・公孫丑上

(二) 潁陽東溪、相傳巢父洗耳處。 王慎中・企鵝亭記

(三) 蟲、本或作虫。 詩・釋文

(己) 獨立の感歎詞、呼懸及び顛倒したる語句の下

(一) 吁、余死矣。

(二) 參乎、吾道一以貫之。 論・里仁

(三) 來、予與汝言。【注 論・陽貨 は「來、予與爾言」に作る】

(四) 何哉、爾所謂達者。 論・顔淵

(五) 子邪、言伐莒者。 呂・重言

(庚) 敘言に連續する曰、云等の字の下

(一) 孟子曰、仁之實、事親是也。義之實、從兄是也。(孟・離婁上)

(二) 徐子曰、仲尼亟稱於水曰、水哉水哉。何取於水也。(孟・離婁上)

(三) 論語云、子張問於孔子曰、何如斯可以從政矣。(論・堯曰)

(四) 季文子使司寇出諸境曰、今日必達。 左・文十八

但左の如き文章も之に準ず

周人以粟、曰、使民戰栗。 論・八佾

吾聞、西域賈胡、得美珠、剖身以藏之。 通鑑・唐八

或傳、嵩有田在亳宋間、武人奪而有之、嵩將詣州訟理、爲所殺。

韓愈・張中丞傳後敘

余案、鄭說是也。

爾雅釋天、春爲蒼天。

(辛) 稍々長き主語の下

(一) 廟堂之義、非草茅所當也。 漢・梅福傳

【注 漢書は「當」下に「言」字あり】

(二) 古之欲明明德於天下者、先治其國。 大學

(壬) 年時を示す語句の下

興元元年、大赦。 十八史略・唐德宗

但年月日時を連記せる場合には適宜讀點を施すへし

以魯襄公二十二年、庚戌之歲、十一月庚子、生孔子於魯昌平鄉陬邑。

論語集注・序說

(癸) 名詞の連續して區別を要する時

尚父、大尉、中書令、汾陽忠武王、郭子儀卒。十八史略・唐德宗

第四 並列せる名詞の間に區別を要する時は並列點を其の中間に使用する其の例左の如し

(一) 再有・仲求可謂大臣歟

【注 論・先進 は「仲由・冉求可謂大臣」與「に作る】

(二) 我欲伐宗・膾・胥敖。莊・齊物

(三) 陶器産於尾張瀬戸・肥前伊萬里。

第五 詩賦駢體文は固有の體裁に従つて唯々句點のみを施す

注意

第一 敘言を敘事と區別せんと欲する時は左の符號を用ふ

(イ)「」(單鉤)

(ロ)『』(雙鉤)

第二 單鉤は敘事中の敘言に用ひ雙鉤は敘言中の敘言に用ふ

第三 文の段落を示さんと欲する時は左の符號を用ふ

(段落符號)

返點法

第一 返點は顛讀を容易ならしむる爲に施すものとす其の符號左の如し

(イ)レ(れ點)

(ロ)一一三三等

(ハ)上下又上中下

(ニ)甲乙丙丁等

(ホ)天地又天地人

第二 レの符號は一字つつを顛讀する場合に用ふ

玉不琢不_レ成_レ器、人不_レ學不_レ知_レ道。禮・學記

第三 一一三三等の符號は二字以上を隔てて顛讀する場合に用ふ但連續せる熟語を直讀する

場合にも用ふ

(一) 廣_二公益_一、開_二世務_一。

(二) 推_レ恩足_三以保_二四海_一。孟・梁惠王上

(三) 蓋有_四以信_三人性之善_一、天下無_二不_レ可_レ化之人_一。王陽明・象祠記

(四) 忠臣不_レ事_二二君_一。說苑・立節

(五) 東里子產潤_二飾之_一。【注 論・憲問 は「東里子產潤_二色之_一」に作る】

(六) 欲_三取_二捨之_一。

(七) 奴_二僕視之_一。

(八) 宜_二靜_レ心以書_レ之_一。

(九) 欲_四取_二捨_三斟_三酌_三之_一。

(十) 未_五嘗不_四嘆_二息痛_三恨於桓靈_一也。 諸葛亮・出師表

第四 上下_又上中下の符號は前二種の符號を用ひたる以外更に顛讀する場合に用ふ

(一) 此謂_下國不_二以利爲_レ利_一、以_レ義爲_上利也。 大學

(二) 如下_下負_二千鈞_一而行_上。 蘇軾・論積缺六事

(三) 此爲_下捐_二虛名_一、而收_中實利_上也。 蘇軾・論積缺六事

第五 甲乙丙丁_等の符號は前三種の符號を用ひたる以外更に顛讀する場合に用ふ但_{二二三}等の符號を用ひたる以外に尚上中下三箇の符號にて足らざる場合には直に此の符號を用ふることを得

(一) 甚非_乙所_下以勸_二獎忠臣_一、慰_中答民心_上之義_甲。 蘇軾・表忠觀碑

(二) 謂_丙不_下以_二衆人_一待_中其身_上而以_二聖人_一望_乙於人_甲。 韓愈・原毀

(三) 誠宜_丙有_二以奉_二其職_一、使_丁四方後代、知_丙朝廷有_二直言骨鯁之臣_一、天子有_乙不_二借_一賞_一、從_レ諫如_レ流之美_甲。 韓愈・爭臣論

第六 天地_又天地人の符號は前四種の符號を用ひたる以外更に顛讀する場合に用ふ

使人籍誠不_乙以下蓄_二妻子_一、憂_中飢寒上亂_甲心、有_二錢財_一以濟_地醫藥_天、其盲未_レ甚、庶復

見_二天地日月_一。 韓愈・代張籍與李潮東書

注意

第一 左の場合には返り點を施さず

(一) 所謂(いはゆる)

(二) 加之(しかのみならず)

(三) 就中(なかんづく)

(四) 云爾(しかいふ)

第二 使、教、遣等を再讀する場合には初讀の符號を施さず

能使_二枉者直_一。 論・顔淵

添假名法

第一 送假名は左の三項の場合を除く外は國語調査委員會にて定めたる送假名法の本則に準據す

(甲) 受身の助動詞に該当する漢字には全部假名を附す

(一) 爲_ル人殺_サ。【注 「人」のよつに送假名「ニ」が必要】

(二) 以_レ讒不_レ見_レ信_セ。 歐陽脩・王彦章畫像

(三) 國武子之所_二以_レ見_レ殺_サ於齊_一也。 韓愈・爭臣論

(乙) 也を「ヤ」、者を「ハ」、與を「ヨリ」と訓する場合には各々全部假名を附し由、自

従を「ヨリ」と訓する場合には最後の二音を附す

- (一) 由也果。論・雍也
 - (二) 韓信者淮陰人也。史・淮陰侯列傳
 - (三) 禮與其奢也寧儉。論・八佾
 - (四) 由堯舜至於湯、五百有餘歲。孟・盡心下
- (丙) 送假名法第八則に擧げたる以外の二音の副詞と雖も送假名を附するを便利とする場
合には最後の二音を附することあるへし

(一) 家故武人。

(二) 將爲君子焉、將爲小人焉。孟・滕文公上

【注 孟子は「將爲野人焉」に作る】

(三) 唯恐有聞。論・公冶長

(四) 雖小國、猶不危之也。韓非・外儲說左上

第二 添附して讀むべき語は送假名の形として記すへし【注 傍線部 原文は丸で囲む】

(一) 柳八緑。萬死猶輕。韓愈・潮州刺史謝上表 有「姓楠トイフ者」。

(二) 有「伊尹之志」。孟・盡心上 到「成德」。人豈信「之」。張治道・

答薛君采書

(三) 禮義之重、如レ之。任重「道遠」。後漢書・祭遵傳

(四) 紛紛「落花」。最大ナル帝國。父「子」子「子」。易・家人

(五) 近「聞」。或「曰」。

(六) 家「給」人「足」。史・商君傳

(七) 斥「不」得「立」。韓愈・答元侍御書 詔「德明」來取「之」。歐陽脩・太尉王

文正公神道碑銘

第三 時を區別するには左の語を用ふ

(イ) リ

賊既平定セリ。後遂爲「大儒」。

(ロ) タリ

負「石」而自沈「於」廬水」。莊・讓王

(ハ) キ

耕而不「顧」。莊・天地

(ニ) タリキ

至則既死「矣」。

(ホ) ン

顧反爲「女」殺「之」。韓非・外儲說左上

第四 時を示す語は句末にのみ附し長文にありては最後の句末の外之を省くことあるへし

(一) 俄失「火」、鄉里共救「之」、幸而得「息」。十八史略・西漢宣帝

(二) 客有_下教_三燕王爲_二不死之道_一者_上、王使_二人學_レ之。所_レ使_レ學者未_レ及_レ學、而客死、王大怒誅_レセリ之。韓非・外儲說左上

第五 敬語には左の語を用ふ但敬語は敘言敘に論無く我が帝室に關する場合の外には之を用ひざるものとす

(イ) タマフ

(一) 淺原爲賴入_レ宮爲_レ亂。天皇避_二ケタマフ之春日殿_一。

(二) 皇后親爲_二リタマフ神主_一。

(三) 秋八月、皇太子加_二ヘタマフ元服_一。

但重複の場合には「ル」又は「ラル」を代用することあるへし

天皇聰明、能辨_二シタマフ大體_一。嘗改_二正_{セラレ}歷代諡號_一、又追_二贈和氣清磨_一

以_二テセラル正一位_一。自_二外國事起_一以來、專覃_二聖猷于皇基_一、其所_下以爲_二社

稷_一計畫_上シタマフ者、至深遠。

(ロ) タテマツル

(一) 正成至_二兵庫_一迎_レレヘタテマツル駕。

(二) 天皇顧_二深須_一曰、汝何不_下戴_二天恩_一、以期_中私榮_上。深須心欲_レ脱_二シタテマル

ント天皇、而憚_二松井在_レ後不_レ果。

第六 敬語の疊出する場合には便宜を省くことあるへし

后篤信_レ佛、建_二檀林寺_一、置_二キタマフ比丘尼持律者_一。

第七 將、宜、猶、賞、未等再讀すへき文字には初讀の送假名を右傍に再讀の送假名を左傍に記すへき

(一) 子將_二ス奚先_一。論・子路

(二) 宜_{シク}鑑_二于殷_一。詩・文王

(三) 文猶_ホ質也、質猶_ホ文也。論・顔淵

(四) 理當_ニ與謀而後命_レ之。

(五) 吾未_ダ見_レ之也。

但使_レ、教等は左の例に準ず

能使_ム枉_二者直_一。(返點法注意第二参照)

注意

第一 已矣哉又は已焉哉の已を「ヤンヌル」と讀み可謂の謂を「イヒツ」と讀む場合は從來の習慣に従ふ

讀方

第一 地名人名等にして從來特殊の讀方あるものは之に従ひ且成るへく地理歴史科に於ける讀方と聯絡を保たしむへし

第二 飢食其 尼父 可汗 冒頓 忽必烈 鐵木眞 明 清 上海 西藏 僕射の類

五經 地圖 行宮 杜撰の類

第三 意義によりて音を異にする文字と雖も混用久しくして習慣となれるものは之に従ふ

射利 畜生

正音 セキリ キクシヤウ

慣用音 シヤリ チクシヤウ

第四 康熙字典の音と異なりたるものと雖も慣用の久しきものは之に従ふ

不 浮 派 話 輪 割 茶の類

正音 ホツ ヒウ ハイ クワイ シユ タフ タ

慣用音 フ ハウ ハ ウ ユ サツ サ

第五 意義を害せざる限り助詞は之を省きて讀むへし其の例左の如し

(一) 夫子之道、忠恕而已矣。 論・里仁

(二) 汝得レ人焉爾乎。 論・雍也 【注「汝」多くは「女」に作る】

(三) 子謂レ韶、盡レ美矣、又盡レ善也。 論・八佾

(四) 雖レ欲レ從レ之、未レ由也己。 論・子罕

(五) 寡人之於レ國、盡レ心焉耳矣。 孟・梁惠王上

(六) 已 焉哉、天實爲レ之、謂レ之何一哉。 詩・家人

左の如き場合には省讀の限りにあらず

(一) 因以誇ニ於田夫野老云爾。 歐陽脩・内製集序

(二) 天下之利莫レ大レ焉。

(三) 人之過哉、各於ニ其黨一。 論・里仁

(四) 麻冕禮也。 論・子罕

第六 熟語の意譯して讀む習慣あるものは之に従ふ

無寧 一任 聞説 就使の類

第七 將、宜、猶、當、使、未等の文字は之を再讀す

(添假名法第八に例出つ)

句讀法以下諸則適用の例【注「官報」の誤植を訂正していない】

義貞軍二兵庫一、飛レ書告レ急、朝廷震動。時北畠顯家已歸レ鎮、京師兵寡。帝命正成、行援二義貞一。正成奏曰、尊氏新舉二九國一而來、其鋒甚銳。我以二疲兵一格闘、無二他奇道一、其敗必矣。爲二今計一者、陛下復幸二叡山一、召二還義貞一、縱レ賊入二京師一、而臣歸二河内一、絶二其糧道一、賊兵日散、我兵日聚。於是來而攻レ之、可二戰而破一也。義貞之計、蓋亦出レ此。顧慮二人言一耳。戰道非一、要歸二於勝一。願朝廷再計レ之。諸公卿皆然レ之。獨參議藤原清忠不レ可曰、賊雖二衆盛一、不レ過レ如二前役一。王師有二天命一、宜キレ防二之外一也。帝從レ之。正成退謂二子弟一曰、事已至レ此、何必抗議。五月十六日、與二弟正季・子正行等一、辭レ闕而西、至二櫻井驛一。正行時年十一矣。正成遣二歸之河内一、誠レ之曰、汝雖幼、已過二十歲、猶能記二吾言一。今日之役、天下安危所レ決。意吾不レ復見レ汝也。汝聞二吾已戰死一矣、則天下盡歸二足利氏一可レ知也。慎勿下計二較禍福一、嚮レ利忘レ義、以廢中乃父之志。苟使二我之族隸一、而有二一人存者一、則率以守二金剛山舊趾一、以身殉レ國、有レ死無レ他。汝所二以報一レ我、莫レ大ニ於此一。因以下帝所二嘗賜一寶刀授レ之、訣別。正行請二從共死一。正成叱レ之起。正行揮レ淚而去。(日本外史卷五楠氏)

余在レ攝既浹辰、遂將スレ入レ京。久聞二箕面之勝一、冠ニ於畿甸一、謀二迂路過一。觀一。二十七日午、發二大阪一、東北渡二長柄川一、行五里、至二山下。盤迴而上、則淨境別開、清溪奔駛、紅欄橋架焉。此間竹經松緯、一往幽折、心甚樂レ之。但日昏黑、寺門閉矣。投二宿門前茶店一。背即溪、終夜有レ聲、琅然到レ枕。明日門開。至二觀音堂一。稍前、左右有レ磴。左爲二行者堂一、右爲二辨天宮一、竝宏麗。合二名之一曰二灌安寺一。滿山皆楓、爛然飽レ霜。色如二渥丹一、綺二錯水巖之間一。時有二墜錦一點一、波杳然流去。談者多言二其勝在二高雄之上、意然。出後門一、沿レ徑而行。楓盡松來、水窮石出。有二巨巖一、竦峙。大如二夏屋一。曰二唐人戾一。戾之爲レ言反也。相傳、昔有二外國人、來遊至レ此、畏レ險反去、故名。更進、聞二大聲鞺鞳震二山谷一。徑轉、望二見瀑布掛二絶壁一。長可二二百尺一。潰珠飛レ空。跳擲而下、至二潭底一、復逆上、輒轟然雷動。有二佛堂一面一、瀑登觀焉。凜然魄悸、不レ能二久留一而去。聞、近畿瀑布、以二那智一爲二第一一、此瀑亞レ之。想當シレ然。且此瀑直下、略不レ遲回、比二之布曳瀑曲折而下者一、其勝各異。曲者委蛇著レ態、小品之文也。直者奔放駕レ勢、大篇之文也。或謂、文貴レ曲而賤レ直、非二通論一也。余觀二瀑一、知二三文有二大小之別一矣。自二堂右一躡レ磴而上、出二瀑頂一。頂凹、蓄レ碧方三丈。上流灌注、底深不レ測。蓋瀑之源也。從二後門一至此、凡十八町。又一里許、至二勝尾寺一。中堂安二觀音大

士^ヲ。爲^リ西國三十三所之一。出^テ前門^一、下^レ阪五十町、至^リ郡山^一、遂^ニ北上^レ入^レ京^ニ。數日往遊^ニ高雄及東福寺^一。兩地之楓、冠^{タリ}於都下^ニ、號稱^ニ勝區^一。然余終不能^レ忘^ル箕面之勝^一矣。(齋藤正謙遊箕面山遂入京記)

士之特立獨行、適^{スル}於義^ニ而已^ニ、不^ル顧^ミ人之是非^一、皆豪傑之士、信^{スル}道篤^ク而自^ラ知^ル明^ク者也。一家非^レ之^ヲ、力行而不^レ惑者寡矣。至^リ於一國一州非^レ之^ヲ、力行而不^レ惑者^一、蓋天下一人而已矣。若^シ至^ニ於舉世非^レ之^ヲ、力行而不^レ惑者^一、則千百年乃一人而已耳。若^キ伯夷^一者、窮^ニ天地^一、巨^ニ萬世^一、而不^ル顧^ミ者也。昭乎日月、不^ル足^レ爲^レ明^一、萃乎泰山、不^ル足^レ爲^レ高^一、巍乎天地、不^ル足^レ爲^レ容也。當^リ殷之亡^一、周之興^一、微子賢也、抱^{キテ}祭器^一而去^レ之。武王周公聖也、從^テ天下之賢士^一、與^テ天下之諸侯^一、而往^{キテ}攻^ル之^ヲ、未^ダ嘗聞^ルレ^ニ非^レ之者^一也。彼伯夷叔齊者、乃獨以爲^レ不可^一。殷既滅矣、天下宗^ス周^一、彼二子乃獨耻^シ食^ル其粟^一、餓死而不^ル顧^ミ。由^レ是而言^ハ、夫豈有^レ求^ル而爲^レ哉。信^{スル}道篤^ク、而自^ラ知^ル明^ク也。今世之所謂士者、一凡人譽^レ之^ヲ、則自^ラ以爲^レ有^レ餘^一、一凡人沮^レ之^ヲ、則自^ラ以爲^レ不^ル足^一。彼獨非^レ聖人^一、而自^ラ是^レ如此^一。夫聖人乃萬世之標準也。予故曰、若^キ伯夷^一者、特立獨行、窮^ニ天地^一、巨^ニ萬世^一、而不^ル顧^ミ者也。雖^モ然^一、微^ニ二子^一、亂臣賊子、接^{セン}迹^ヲ于後世^一矣。(韓愈伯夷頌)